

小・中学校体育授業における言語活動の意味に関する再検討 —「学び合い」に着眼して—

国本 朋乃佳 (大阪教育大学)

1. 目的

本研究の目的は、小・中学校の体育授業における言語活動の充実の本質とその必要性を明らかにする。よく混同されやすい「話し合い活動」との違いを探っていく、その上で質の高い、本来の目的に沿った「言語活動」の充実とはどのようなものであるかを「学び合い」という観点から検討していくことである。

2. 結果と考察

平成15年に実施されたPISA調査の結果から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に課題があることが明らかになった。これを踏まえて、平成20年改訂の学習指導要領では重要事項の第一項目に取り上げられたのが「言語活動の充実」であった。各教科で「言語活動の充実」を図るための授業改善がなされ、体育科でも様々な工夫がされてきた。体育科における「言語活動の充実」では、「コミュニケーション能力」、「感性・情緒の基盤」、「論理的思考力」の育成が本来の目的であり、これらの育成に向けた授業こそ、言語活動が充実している授業であるといえる。しかし現行の学習指導要領には課題として「習得した知識や技能を活用して課題解決すること」、「学習したことを相手に分かりやすく伝えること等」などの、思考力・判断力・表現力等に関する課題であり、「言語活動の充実」による思考力・判断力・表現力等の育成は大きな成果が見られなかったといえる。これは「言語活動の充実」についての早計な理解によって、授業内での話し合い活動の導入にのみ終始したことが原因にあるとし、言語活動と話し合い活動の違いについて考えた。

このことについて佐藤(2011)は教師が「話し合い」と「学び合い」を混同しているという批判をしている。「学び合い」と「話し合い」は全く違うものであり、それをきちんと識別できることが重要であると述べている。ある授業研究では、「学び合い」は運動の中心のおもしろさを活かした動きや課題を仲間と共有し、技術の向上を目指す探求活動と捉えられており、このことから「運動の中心のおもしろさ」を中心に構成された授業展開の中でこそ、子どもたちの学び合いの場が生まれ、その中の「話し合い活動」も質の高いものになるといえる。この時行われる子どもたち同士の話し合いでは、互いに見

つかった課題や、習得した動きを相手に伝えるなどのアドバイス活動が多く見られるといえる。アドバイスを相手にきちんと伝えるためには、動きを正確に言語化できることが重要である。この動きの言語化の際に用いられる言葉を佐藤(2011)は「技のことば」と名付け、これを子どもたちに育ませることが必要であるとした。そのために教師は運動や技をきちんと理解し、「技のことば」を使い正確に動きの言語化を図ることで、子どもたち同士の学び合いの場面でも積極的に「技のことば」が使えるようになるのではないかと考える。そしてそれが質の高い話し合い活動を生み、学び合う授業になっていくのではないかと考える。

3. 結論

学び合う授業では自然と子どもたち同士の話し合い活動が生まれ、それが結果として「言語活動の充実」につながるといえる。その中で思考力・判断力・表現力といった力が育まれていくことが期待できる。そのためには教師が運動の中心のおもしろさを軸にした授業づくりをすること、そしてそれを正確に表現するために動きの言語化を図り、子どもたちに伝えるために「技のことば」を習得することが求められている。

<参考文献>

- 1) 中央教育審議会(2008) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善について. 文部科学省.
- 2) 加藤純一(2011) 動きの言語化を図る方策を探る. 体育科教育, 59(11), p. 28.
- 3) 松尾剛・丸野俊一(2007) 子どもが主体的に考え、学びあう授業を熟練教師はいかに実現しているか:話し合いを支えるグラウンド・ルール of 共有過程の分析を通じて. 教育心理学研究, 55(1):93-105.
- 4) 岡野昇・佐藤学(2015) 体育における「学びの共同体」の実践と探求. 大修館書店.
- 5) 佐藤学(2011) 体育の授業における言葉の学び. 体育科教育, 59(11), p. 9.

